# 古典語複合動詞から現代語複合動詞へ

林　　翠　　芳



## 1．はじめに

古典語における二動詞の連続形「連用形＋終止形」については，不連濁・アクセント形式などから，一語として認めないと一般に言われていることは，古典語複合動詞の前項要素と後項要素間の結合関係が弱いことを物語っている。しかし，形態的に見ると，古典語は現代語とほぼ同じ形をしているので，本稿では古典語の二動詞の連続を複合動詞と捉えるという立場をとり，現代語の中に生き残ったもの，また，すでに使用されなくなったもの，さらに新しく生成されたものなどを中心に考察を進める。

## 2．資料

考察に当たって，古典語では東辻保和氏の「平安時代複合動詞後項索引稿（上・下）」（1978・1979）を，また，現代語では『複合動詞資料集』（1987）を利用することにし，両資料における共通の語を抽出し，使用頻度の高い後項要素を中心に考察する。今回は古典語後項において度数２以下のものを考察の対象から外した。なお，度数２以下の後項要素数は全部で388語あり，全体の半分以上を占める。

まず，両資料から算出された数値を表１に示す。

表１古典語・現代語の複合動詞数

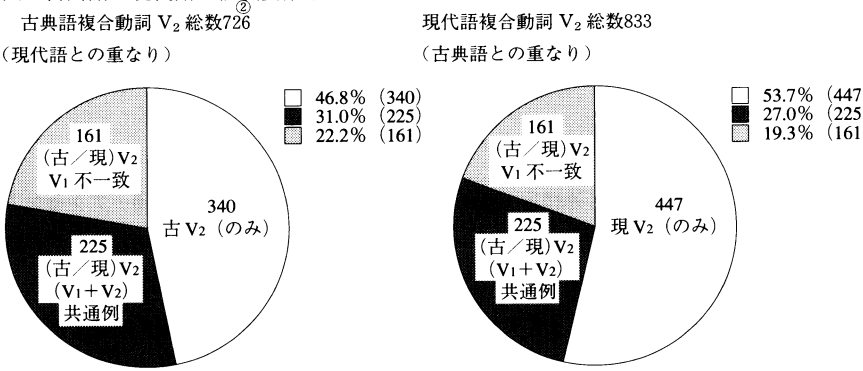
| 項目／語 | 語数(A) | 古典語現代語共通複合動詞数(B) | （Ａ－Ｂ） | % |
|---|---|---|---|---|
| 古典語 | 4829 | 775 | 4054 | 16.04 |
| 現代語 | 7432 | 775 | 6657 | 10.42 |

注：上記統計の語数は，現代語については『複合動詞資料集』の統計によるもので，古典語については「平安時代複合動詞後項索引稿（上・下）」に基いて算出したものである。東辻氏の統計と若干ずれがある。①

上記表１で見る限り，複合動詞は，現代語では古典語より2603語多く，両項要素が共通であるものは775語となっている。古典語，現代語のそれぞれの中における消長を見

ると，16%の語が現代語の中においてなお使用され，逆に現代語のうち10%が古典語から受け継がれたものである。古典語から現代語へと一貫して使われてきた語が，古典語，現代語の中においてあまり大きな割合を占めていないことが分かる。次に，古典語・現代語の後項要素（$V_2$）についての数値を図1に示す。

図1 古典語・現代語の後項要素数




複合動詞の後項要素は，現代語は古典語より107語多く，前項要素に共通例のある共通要素は225語と，古典語・現代語の後項要素の中においてそれぞれ31%と27%という割合である。また前項要素に共通例が見られなかったが，古典語から現代語へと一貫して複合動詞の後項要素として用いられた語は161語あり，共通例のある共通要素を合わせると386語となって，古典語後項要素の53%，現代語後項要素の46%も占めており，全体の約半数を占めている。こうして見ると，複合動詞の後項要素の継承率は，語全体の継承率よりも高いという当然な結果になる。

そして，後項要素が複合動詞の中に用いられている負担率を見ると，古典語・現代語それぞれで次のようになる。

後項動詞の負担率：

古典語　　4829÷726＝6.65

現代語　　7432÷833＝8.92

現代語の後項要素の負担率は古典語のそれより2・27%も高くなっている。つまり，現代語の後項要素の方が集中率が高いのである。個別的に見てみよう。古典語・現代語のそれぞれの後項要素の使用頻度上位50語は表2のようになる。

表2 古典語・現代語の後項要素の使用頻度（上位50語）

| 順位 | 古典語 | 度数 | 現代語 | 度数 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | いづ | 135 | 出す | 432 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 2 | 果つ | 123 | 得る | 432 |
| 3 | 合ふ | 90 | 始める | 399 |
| 4 | 置く | 89 | 合う | 273 |
| 5 | ゐる（居） | 88 | 掛ける | 236 |
| 6 | く（来） | 83 | 込む | 231 |
| 7 | 行く | 81 | 切る | 207 |
| 8 | ありく | 76 | 過ぎる | 173 |
| 9 | そむ（初） | 71 | 続ける | 169 |
| 10 | 渡る | 70 | 付ける | 143 |
| 11 | 遣る | 62 | 上げる | 129 |
| 12 | 為す | 59 | 兼ねる | 110 |
| 13 | 寄る | 52 | 掛かる | 90 |
| 14 | 入る（四段） | 49 | 尽くす | 76 |
| 15 | 立つ（四段） | 49 | 付く | 75 |
| 16 | 立つ（下二） | 49 | 返す | 73 |
| 17 | 入る（下二） | 44 | 立てる | 72 |
| 18 | まさる | 44 | 直す | 72 |
| 19 | いだす | 43 | 上がる | 71 |
| 20 | 取る | 43 | 取る | 70 |
| 21 | 騒ぐ | 42 | 合わせる | 69 |
| 22 | 思ふ | 36 | 去る | 68 |
| 23 | くらす | 36 | 終わる | 62 |
| 24 | まどふ | 36 | 入る | 58 |
| 25 | 敢ふ | 35 | 立つ | 57 |
| 26 | おはす | 34 | 替える | 51 |
| 27 | かはす | 34 | 抜く | 50 |
| 28 | かかる | 33 | 通す | 49 |
| 29 | 付く（四段） | 33 | 出る | 48 |
| 30 | はじむ | 33 | 返る | 47 |
| 31 | 渡す | 33 | 入れる | 46 |
| 32 | 付く（下二） | 32 | 落とす | 46 |
| 33 | 罵る | 32 | 回る | 45 |
| 34 | すぐす | 31 | 回す | 43 |
| 35 | 合はす | 30 | 果てる | 43 |
| 36 | 掛く | 28 | 渡る | 39 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 37 | 返す | 28 | 捨てる | 38 |
| 38 | かへる | 28 | 行く | 35 |
| 39 | 捨つ | 28 | 来る | 35 |
| 40 | 添ふ（下二） | 28 | 寄る | 33 |
| 41 | おはします | 27 | 歩く | 33 |
| 42 | わづらふ | 27 | 合わす | 33 |
| 43 | わぶ | 27 | おる | 33 |
| 44 | 据う | 26 | 分ける | 32 |
| 45 | 臥す（四段） | 26 | 慣れる | 29 |
| 46 | 馴る | 25 | 殺す | 29 |
| 47 | 居り | 25 | 散らす | 29 |
| 48 | 上ぐ | 24 | 詰める | 28 |
| 49 | 申す | 24 | 切れる | 28 |
| 50 | 寄す | 24 | 落ちる | 27 |

この表で分かるように，現代語の後項要素の使用頻度の高い上位語は，古典語のそれより遥かに高い。しかし，順位38以下あたりから，その使用頻度の差も一桁に縮まっている。だが，上位語の重なりが低い。つまり，現代語と古典語の複合動詞後項要素の使用頻度の高い語は，それぞれ違っているのである。ことに，上位20位までの古典語と現代語の重なりが「合う」（3位／4位），「立てる」（16位／17位），「取る」（20位／20位）の三語しかなく，〈単純に両資料の数字で比較した場合〉いずれも現代語の方が使用度数が高い。また，偶然かも知れないが，三語の順位もほぼ同じ順位である。順位50位までででは，上記三語を含めて，22語の重なりが見られるのは看過できないところである。

古典語において，「果つ」「く」「行く」「渡る」「寄る」の五語は現代語において衰退し，逆に「掛かる」「付く」「始める」「付ける」「掛ける」「返す」「上げる」などは，古典語よりも頻用されている。以下，次章，次々章においてそれぞれの語の消長を具体的に見ていこう。

## 3．古典語で頻用される語

古典語から現代語への移行過程の中で，複合動詞の後項要素としての使用頻度に消長があるのはなぜだろうか。一つは，例えば，「おはします」「おはす」のように，その語自体が現代語としてあまり使われなくなったことである。また，例えば，「おぼし～」のように，複合動詞を構成する前項要素の動詞が現代語ではあまり使われなくなったこ

とである。語形の長い語は自然淘汰されることが多い。いま一つは，その動詞が複合動詞の後項要素として用いられる時の意味・機能にも理由が求められよう。これらのことを総合すると，古典語で頻用されている複合動詞の後項要素は，大きく二分することができる。一つは現代語では複合動詞の後項要素としての結合力が衰えている語，今一つは現代語では複合動詞の後項要素としてほとんど用いられなくなっている語である。

### 3-1　語の衰退

#### 3-1-1　結合力の衰退した語

両資料から，古典語では前項要素との結合例が多かったが，現代語では結合力が衰えているものを，単純にその数値で見ると，約120例ほど拾うことができる。紙幅の関係でここでは度数20以上の語（27例）を表３に示す。

表３古典語と現代語における結合力の対比

| 後項 | 古典語 | 現代語 | 両項共通 | 分類コード | 後項 | 古典語 | 現代語 | 両項共通 | 分類コード |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明かす | 21 | 11 | 4 | 2.16 | 留める | 20 | 4 | 3 | 2.15 |
| 集む | 21 | 13 | 5 | 2.15 | 習ふ | 21 | 4 | 1 | 2.30 |
| 出だす | 43 | 2 | 1 | | 罵る | 32 | 1 | 1 | 2.31 |
| いづ | 135 | 48 | 22 | 2.12 | 果つ | 123 | 43 | 18 | 2.15 |
| 隠す | 20 | 6 | 3 | 2.12 | 放つ | 22 | 6 | 3 | 2.15 |
| 交はす | 34 | 14 | 6 | 2.15 | 臥す | 26 | 8 | 3 | |
| 通ふ | 23 | 4 | 3 | 2.15 | 優る | 44 | 3 | 3 | |
| 暮らす | 36 | 10 | 8 | 2.33 | 惑ふ | 36 | 3 | 1 | 2.30 |
| 止す | 20 | 5 | 4 | | 寄る | 52 | 33 | 7 | 2.15 |
| 騒ぐ | 42 | 11 | 2 | 2.33 | 渡す | 33 | 14 | 4 | 2.15 |
| 知る | 22 | 7 | 3 | 2.30 | 渡る | 70 | 39 | 10 | 2.15 |
| 据う | 26 | 5 | 1 | 2.15 | 煩ふ | 27 | 2 | 1 | 2.30 |
| 添ふ | 28 | 8 | 4 | 2.15 | 侘ぶ | 27 | 3 | 3 | 2.30 |
| 初む | 70 | 16 | 5 | 2.15 | | | | | |

注：「添ふ」は下二段動詞である。「出だす」は現代語にも同じ形の「出だす」があるので，「出だす」と同語と見なした。もし「出す」と対応させるなら，この語は，次章４―１の方で考察すべきであろう。「習ふ」には，ほかに「慣ふ」と表記されるものがあるが，スペースの関係で一語のみを挙げた。「分類コード」とは『分類語彙表』の分類番号である。空白の部分は『分類語彙表』になかった語である。

竹内美智子（1982）は，源氏物語を資料に複合動詞の「後項として複合力の大きいのは次の諸語，あかす，あふ（あへず），ありく，いる（ママ），おく，おはします，かかる，かはす，かへる，くらす，さす，さわぐ，さる，しる，すぐす，たつ，ちる，つく，つくす，とる，なす，なる，のこす，ののしる，まさる，まどはす，まどふ，みつ，やる，

ゆく，よる，わたす，わたる」と指摘し，さらに「これらは殆どが補助動詞化した語で，それだけに種々の語と複合する可能性をもっている。……現在では複合力が衰弱してしまった。」という。確かに竹内氏の言うようにこれらの語はほとんど補助動詞化している語で，使用度数も比較的高い。しかし竹内氏が挙げている後項要素のうち，「かかる」(30/90/14)，「かへる」(28/47/ 6 )，「さる」( 6 /68/ 2 )，「つく」(18/75/12)，「つくす」(18/76/ 6 )，「とる」(43/70/18)，「のこす」( 9 /26/ 4 ) などの語は，今回の両資料で見る限り，現代語においても後項要素として古典語以上に頻用されていることが分かった。(括弧の中の数字は，順に古典語後項／現代語後項／両者共通を表す)。このような語は現代語の複合動詞の中で補助動詞的な働きをしているものが多く，中にはアスペクト的な役割を果たしている語もある。

表3に挙げた語は，竹内氏の言うように，やはり古典語においてほとんど補助動詞化した語で，種々の語と接続しえるものである。現代語でそれらの勢力が衰えたのはなぜだろうか。その理由として考えられるのは，以下の事象である。

(1) 単純語自体の語の意味が縮小した。例えば，「罵る」は現代語では「口ぎたなく悪口を言う」の意味しかないが，古典語では「①やかましく騒ぐ。②世間で評判される。③勢い盛んである。」などの意味をもっている。

(2) 現代語では他の語によって代替された。例えば，「～初む」は，現代語では「～初める」よりも「～始める」の形でよく用いられる。「～初める」の16例はほとんど「～始める」の方にも用例が見られる。勿論「～初める」は「～始める」と完全に重なるものではない。(古典語では「～はじむ」は33例で，本稿では次章の4―1で扱っている。)「～初む」と「～はじむ」は古典語と現代語で語の結合力が逆転している。

(3) 古典語複合動詞の前項と後項の結合が緩く，それぞれの語の独立性が強い。

表3に挙げた（出だす，止す，通ふ，留める，罵る，優る，侘ぶ，煩ふ，惑ふ，暮らす）などは，現代語では複合動詞の後項要素としてほとんど機能していない。古典語から引き継いだものを除き，現代語で新しく出現した複合動詞が10語以上あるのは，「いづ」「初む」「果つ」「寄る」「渡す」「渡る」の六語だけである。

では，ここで古典語で最も頻繁に用いられた上位二語「いづ」「果つ」について見ることにする。

「いづ」は現代語では「出る」となるが，「～出る」は「～上がる」「～上げる」と表現できる場合もある。「浮かび出る／浮かび上がる」，「浮き出る／浮き上がる」などである。「～出る」はまた「～出す」とも重なって，「滑り出る／滑り出す」「抜け出る／抜け出す」「はみ出る／はみ出す」「飛び出る／飛び出す」のような自他動詞の対応例を

もつ。現代語では複合動詞の後項に来る自他動詞の対応例のある「始める（432）／始まる（０）」「掛ける（236）／掛かる（90）」「上げる（129）／上がる（71）」「切る（207）／切れる（28）」「付ける（143）／付く（75）」等はいずれも他動詞の方が結合力が強い。ところが古典語においては自動詞（四段）の方の結合力が若干強い。

「～果つ」は古典語では「……しおわる。……してしまう。完全に……しきる。」の意を表す。現代語では「限界まで（最大限に）……する。すっかり……する。」の意を表す。現代語で新しく出現した語を見ると「呆れ～，あぐね～，生き～，薄れ～，倦み～，零落（おちぶ）れ～，衰え～，けがれ～，朽ち～，困じ～，困り～，蔑み～，錆び～，萎み～，精（しら）げ～，捨て～，退屈し～，絶え～，疲れ～，見下げ～，痩せ～，やつれ～，破れ～，弱り～，」などがあり，前項にくる語は褒貶の二つの意味で分けると，褒の方には分布しにくく，あまり望ましい状態を表す語ではない。古典語と共通する18語もほぼこのような特徴を持つ語である。上記の語のうちは，「困り果てる」「疲れ果てる」「絶え果てる」「呆れ果てる」の四語以外は辞書では見出し語として扱っていない。しかし，古典語ではこのような特徴を持つ語以外にも，「うけたまわり果つ」「憧れ果つ」「飾り果つ」従ひ果つ」「したため果つ」のように，他の語とも接続でき，「果つ」と結合できる語は現代語よりも幅が広く，制約が緩いようである。また，現代語には「完全に……する」のような意味を表す語としては「～抜く」「～通す」もある。

3-1-2 「～て～」の形

古典語において比較的よく用いられたが，現代語では複合動詞としては衰退したものの，「動詞連用形＋て～」の形で用いられている語がある。

括弧の中の語は（古典語後項／現代語後項／両方の共通例）を表す。

置く （89／21／15）

来 （83／35／13）

見る （22／９／２）

遣る （62／16／９）

行く （81／35／12）

ゐる （88／８／３）

などの例はいずれも現代語では複合動詞の後項要素としても用いられるが，「～ておく」「～てくる」「～てみる」「～てやる」「～ていく」「～ている」の形でよく使われる。『学研国語大辞典』ではこのような形の語を補助動詞として扱い，そして「動詞連用形＋終止形（上記語）」の形を接尾語として扱っている。

3-2 使用されなくなった語

ここに分類される語は，さらに細分することができる。一つは複合動詞の構成要素として現代語では前項にも後項にも使われなくなっている語で，いま一つは，現代語において後項には使用例がなく，前項に使用例があった語である。

3-2-1　完全に使用されなくなった語

度数3以上の語は全部で約56語拾うことができた。

あかる(4)，敢ふ(35)，過つ(4)，ありく(76)，往ぬ(4)，います(3)，うしろみる(3)，倦ず(3)，疎む(3)，掟つ(8)，おこす(11)，驚かす(6)，おはさうず(5)，おはします(27)，おはす(34)，思召す(4)，おもほす(4)，かかづらふ(4)，かしづく(14)，かつ(3)，かへさふ(4)，かる(3)，くくむ(5)，くたす(3)，覆る(3)，くづほる(3)，放く（下二)(3)，さぶらふ(4)，しつらふ(4)，染む（下二)(4)，すぐす(31)，滑す(4)，そしる(3)，そす(8)，たがふ（下二)(5)，頼む（下二)(4)，つかうまつる(6)，とぶらふ(8)，取らす(3)，為す(59)，なずらふ(3)，なむ（四段)(4)，のたまふ(10)，はばかる(3)，はぶ（下二)(4)，僻む（下二)(3)，まかづ(4)，ます(3)，まつはす(6)，まとはす(4)，惑はす(6)，みだる（四段)(9)，ものす(13)，やる（四段)(3)，わななく(3)，ゐる(率)(3)

ここに挙げた語は少数の語を除き，現代語では単純語としても使われなくなっている語であり，また，複合動詞の後項要素として古典語においては使用度数3或いは4の語が大多数を占めている。使用頻度が際立って高い語について見ると，「敢ふ」「ありく」「おはします」「おはす」「すぐす」「為す」は古典語において補助動詞的な役割を果たしているが，「為す」を除くと，その他の語はいずれも現代語では，ほとんど用いられなくなっている。

3-2-2　前項要素として使用されている語

表4 現代語において後項としては使われなくなったが前項としては使われている語

| 要素 | 古典後 | 現代前 | 現代後 | 分類コード | 後項 | 古典 | 現代前 | 現代後 | 分類コード |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明く | 7 | 9 | 0 | | さまよふ | 5 | 6 | 0 | 2.33 |
| 遊ぶ | 10 | 9 | 0 | 2.33 | したたむ | 3 | 1 | 0 | |
| あづく | 3 | 1 | 0 | | たすく | 4 | 8 | 0 | 2.36 |
| 営む | 6 | 2 | 0 | 2.34 | 垂る(下二) | 6 | 6 | 0 | 2.1 |
| 疑ふ | 4 | 9 | 0 | 2.30 | 契る | 5 | 1 | 0 | 2.35 |
| 怖づ | 4 | 2 | 0 | | 作る | 4 | 11 | 0 | 2.38 |
| 驚く | 5 | 5 | 0 | 2.30 | 嘆く | 13 | 5 | 0 | 2.30 |
| おほす | 3 | 4 | 0 | | 成る | 15 | 21 | 0 | 2.12 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 思す | 18 | 1 | 0 | | 濡らす | 3 | 1 | 0 | 2.15 |
| 思ふ | 36 | 78 | 0 | 2.30 | 申す | 24 | 27 | 0 | 2.31 |
| 書く | 13 | 66 | 0 | 2.31 | まさぐる | 3 | 1 | 0 | |
| 飼ふ | 3 | 4 | 0 | 2.38 | 参る | 20 | 2 | 0 | 2.35 |
| 着る | 6 | 19 | 0 | 2.33 | 譲る | 4 | 6 | 0 | 2.37 |
| こうず | 8 | 1 | 0 | | 弱る | 3 | 3 | 0 | 2.15 |

注:「古典後」は古典語後項使用度数をさし,「現代前」は現代語前項使用度数をさし,そして「現代後」は現代語後項使用度数をさす。

このグループのほとんど(28例)は,単純語として現代語において使用されている点が,3-2-1と大きく違うところである。現代語において複合動詞の後項要素として使われなくなっているが,前項要素として活躍している。中でも「思う」「書く」「着る」「成る」「申す」などの語は,前項要素としての結合例が多い。全体として言えることは,現代語において,人間の基本的な動作,行為などと深く関係する動詞は,現代語では複合動詞の前項要素として用いられる場合が多い。また,『分類語彙表』で見ると,これらの語は,ほぼ分類コード2.3の「精神及び行為」に分類されるものである。以前に,三次結合複合動詞の構成要素について考察した時③,分類コード2.3の「精神及び行為」は前項要素に,分類コード2.1の「抽象的関係」は後項要素に位置しやすいという事実について指摘した。

## 4.現代語で活躍する語

### 4-1 生産性(語の発展)

前章3-1では,古典語から現代語に引き継がれたものの,現代語では衰退した語を中心に考察した。この章では,古典語から現代語に引き継がれた語が,現代語ではその結合力がさらに伸び,古典語より生産的となった語を中心に考察する。次の表5に現代語において使用度数20以上のもの(42例)を示す。

表5 現代語において生産的となった語

| 後項 | 古典語 | 現代語 | 両項共通 | 分類コード | 後項 | 古典語 | 現代語 | 両項共通 | 分類コード |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 合う | 90 | 273 | 21 | 2.15 | 過ぎる | 21 | 173 | 7 | 2.15 |
| 上がる | 10 | 71 | 8 | 2.15 | 捨てる | 28 | 38 | 10 | 2.12 |
| 上げる | 24 | 129 | 11 | 2.15 | 損なう | 4 | 21 | 3 | 2.13 |
| 歩く | 2 | 33 | 0 | 2.15 | 倒す | 3 | 27 | 3 | 2.15 |
| 入る | 49 | 58 | 20 | 2.15 | 立つ | 49 | 57 | 10 | 2.15 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 得る | 19 | 432 | 8 | 2.37 | 立てる | 48 | 72 | 15 | 2.15 |
| 落ちる | 7 | 27 | 1 | 2.15 | 散らす | 16 | 29 | 7 | 2.15 |
| 落とす | 13 | 46 | 8 | 2.12 | 付く | 32 | 75 | 12 | 2.15 |
| 下ろす | 16 | 23 | 6 | 2.15 | 尽くす | 18 | 76 | 6 | 2.12 |
| 終わる | 2 | 62 | 0 | 2.15 | 付ける | 32 | 143 | 18 | 2.15 |
| 掛かる | 33 | 90 | 14 | 2.15 | 続ける | 23 | 169 | 9 | 2.15 |
| 掛ける | 28 | 236 | 12 | 2.15 | 潰す | 2 | 33 | 1 | 2.12 |
| 兼ねる | 13 | 110 | 5 | 2.11 | 詰める | 2 | 28 | 1 | 2.15 |
| 返す | 28 | 73 | 11 | 2.15 | 通す | 3 | 49 | 3 | 2.15 |
| 返る | 28 | 47 | 6 | 2.15 | 止める | 13 | 24 | 5 | 2.15 |
| 切る | 6 | 207 | 4 | 2.15 | 取る | 43 | 70 | 18 | 2.15 |
| 切れる | 1 | 28 | 0 | 2.15 | 直す | 17 | 72 | 8 | 2.15 |
| 越す | 3 | 20 | 1 | 2.15 | 抜く | 1 | 50 | 1 | 2.15 |
| 込む | 9 | 231 | 5 | 2.15 | 残す | 9 | 26 | 4 | 2.12 |
| 殺す | 3 | 29 | 2 | 2.58 | 始める | 33 | 399 | 16 | 2.15 |
| 去る | 6 | 68 | 2 | 2.15 | 分ける | 10 | 32 | 5 | 2.15 |

注：語例は現代語表記に直しており，また『分類語彙表』で二種類以上に分類されている場合は，スペースの関係で，頭記されている分類番号のみを表に記した。本稿では単純に数の多少によって分類しているので，表５における「入る，止める，捨てる，立つ」は現代語と古典語の度数にあまり開きがないので，別章を立てて論じるべきであるが，古典語・現代語の使用度数に差のない語は今回考察の対象から外した。勿論，両資料の複合動詞の総数に差があるので，単純にその数字だけで分類するのは危険であろう。なお，紙幅の関係で度数20以下の語（55例）を省略する。

以上の語は，現代語複合動詞の後項度数順構成要素上位50語のうちの37語を占めている。現代語において後項構成要素の上位語は，ほとんどが古典語においてすでに使われていたものであるが，これらは現代語においてさらに頻用されるようになっている。また，『分類語彙表』で見ても，表に挙がっている語は，ほとんどが分類コード２．１の「抽象的関係」に分類されている語である。

寺村秀夫（1969・1984）では，前項，後項の独立性という観点から複合動詞を「自立V＋自立V」「自立V＋付属V」「付属V＋自立V」「一体化したもの」と四分している。上記の語によって構成されている複合動詞のほとんどは「自立V＋付属V」の分類に納まることになろう。つまり，複合動詞の中において付属的な役割を果たしているのである。現代語で複合動詞の後項として使用度数の上位を占めるのは，アスペクトを表す語である。ここに，使用度数三桁の語を挙げると，「上げる」「合う」「得る」「掛ける」「兼ねる」「切る」「込む」「過ぎる」「付ける」「続ける」「始める」の11語となる。「始める」「続ける」をはじめ，アスペクト的な使い方を持っている語が多い。また，「合う」

は「①互いに……する。②……して一緒にする。」,「得る」は「……ができる」の意を表す。「兼ねる」は「……することができない。……することが難しい。……することがはばかられる。」,「過ぎる」は「物事がある数量・程度をこえる，度をこえる。」等の意を表す。いずれも多くの語と接続することができ，ことに，「始める」などは，臨時一語を構成する場合が多い。

4-2　新出語

3-2で古典語にのみ出現する語を挙げたが，ここでは現代語で新しく複合動詞の後項要素として出現した語について触れる。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 出す(13／432) | 放つ(0／22) | 飛ぶ(0／19) | 迫る(5／9) |
| 足りる(0／13) | 替える(1／15) | 下がる(1／12) | 腐る(3／7) |
| こなす(1／11) | 回る(11／45) | 疲れる(5／16) | 成す(5／13) |
| 抜ける(10／16) | 与える(6／9) | 戻す(3／7) | 戻る(0／15) |

「出す」は前にも述べたように「出だす」と対照して見ると，新出語とは言えない。また，「替える」には「替わる」(16),「下がる」には「下げる」(6),「回る」には「回す」(10),「抜ける」には「抜く」(1)というように，古典語では後者の複合動詞例が見られる。これらの語を除くと，「飛ぶ」「戻す」「戻る」「足りる」「こなす」「疲れる」「成す」「迫る」「腐る」「与える」などの語が残るが，後項要素としての使用度数はいずれもそれほど多くはない。(括弧の中の数字は古典語における複合動詞後項の使用度数である。)

## 5．終わりに

今回の調査で，現代語の複合動詞のうち古典語複合動詞から引き継がれたものはわずか一割であり，後項要素だけで見た場合は全体の約五割を占めていることが分かった。また，多くの後項要素は古典語の段階ですでに補助動詞化されていることが分かった。しかし，古典語は見かけ上，複合動詞のような形でありながら，現代語に直すと「～て～」などとなり，前項と後項の独立性が強く，その結合度も比較的緩やかである。一方，現代語の方は，前項と後項の結合は古典語よりも強く，二つの動詞の連続「連用形＋終止形」の形は一般に複合動詞として認められている。また，自他の対応がある場合は，現代語では他動詞，古典語では自動詞の方が結合力が強い。ただ，今回は単純に両資料を中心に古典語複合動詞と現代語複合動詞を数字の上から分類・判断し，その消長を見たに止まる。個個の語については，もっと深く考察する必要があり，また，3-2-2に挙げた語については，今回深い吟味ができなかったが，後考で述べることにしたい。また，

本稿は複合動詞の通時的変化について考察することを目的としていないことをここに断りっておきたい。

最後に，本稿の執筆に当たり，東辻保和先生から快く「平安時代複合動詞後項索引稿」（上・下）と「平安時代複合動詞後項索引稿」㈡の提供をいただいた。今回の考察では，「平安時代複合動詞後項索引稿」の（上・下）の方のみ利用させていただいた。また，本稿の要旨を同志社国語学研究会で口頭発表した際，意見やアドバイスをいただいた。ここに，併せて感謝の意を表する。

**注**

① 東辻氏の「平安時代の複合動詞後項について」は「平安時代複合動詞後項索引稿」の後項動詞数を727項としている。

② 東辻氏の「平安時代の複合動詞後項について」は「平安時代複合動詞後項索引稿」の複合動詞全異なり数を4816語としている。

③ 「三次結合複合動詞の構成要素について――二次結合との比較を通して――」（『同志社国文学』第40号，1994，に所収）

**参考文献**

① 東辻保和「平安時代複合動詞後項索引稿」（上・下）（『高知大学学術研究報告』第27巻，第28巻　人文科学　1978，1979）

② 野村雅昭・石井正彦・林　翠芳『複合動詞資料集』（特定研究「言語データの収集と処理の研究」1987）

③ 東辻保和「平安時代の複合動詞後項について」（『国語教育研究』第26号上，広島大学教育学部光葉会，1980）

④ 東辻保和「いわゆる複合動詞後項の意義論的考察――源氏物語を資料として――」（『国文学攷』69，1975）

⑤ 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』（くろしお出版，1984）

⑥ 寺村秀夫「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト(1)」（『日本語・日本文化』1　1969）

⑦ 武部良明「複合動詞における補助動詞的要素について」（『金田一博士古稀記念言語民族論叢』三省堂，1953）

⑧ 姫野昌子「動詞の連用形に付く補助動詞及び複合動詞後項」（『日本語教育事典』大修館書店，1988縮刷版２版）

⑨ 竹内美智子「和語の性格と特色」（講座日本語の語彙２『日本語の語彙の特色』明治書院，1982）

⑩ 金田一春彦・池田弥三郎編『学研国語大辞典』学習研究社，1981第11刷

⑪ 金田一京助等編『新選国語辞典』第三版　小学館　1978